

書 評

木村武雄著『欧州におけるポーランド経済』

箱 木 眞 澄*

本書は、中東欧経済、それもポーランド経済に分析の重心を置いた研究書ではあるが、著者の中東欧経済全般にわたる該博な知識に裏打ちされているので、中東欧経済の研究者には百科全書的な役割を期待できるうえ、これから研究を始めようとする者にとっては絶好の手引書となるだろう。

それでは何故に中東欧経済の研究がわれわれ日本人にとって必要なのだろうか。学問上の研究は、それ自身が価値を持っているのかどうかといった難しい議論はさておいて、中東欧経済の研究は、産業界・官界・学界への情報供給といった実用的な観点からはかなりの重要性を持っているのではないか。このことは、中東欧経済についての研究を行っている内外の研究所のなかには、たとえばオーストリアのウィーン比較経済研究所や、わが国のロシア東欧経済研究所等のごとく、会員にのみ濃密な情報提供を行う制度をとっていて、しかも産業界のみならず、官界・学界からの会員も相当数を占めているところがあることから理解できるだろう。

日本の貿易総額に占める中東欧のシェアはまだ約2%程度であって、まだ微々たるものではあるが、中東欧諸国が中央計画経済体制を離脱して市場経済への移行をはじめて以来欧米では“emerging market”と表現されている通り、この市場の将来性は高く評価されているのである。しかも、現状でこそ社会経済情勢が混沌としていて、当面は貿易の拡大があまり期待されてはいないものの、こういった混乱が収拾された暁には広大な市場が開けることが期待される旧ソ連邦諸国とも地理的、言語的に近接関係にあって、将来的にはこれら諸国への輸出基地としても重要になると考えられる。さらには、中東欧諸国はEUへの加盟申請を1990年代前半には終え、現在では加盟交渉も行っているのであって、そう遠くない将来にはEUに加盟することも期待されている。すでに欧州協定（「準加盟協定」とも呼ばれている）によって中東欧諸国原産の工業品の輸入に対してはEUでは関税を課していないので、中東欧諸国に立地している多国籍企業の工場は、EU諸国への工業製品の輸出

* 広島経済大学経済学部教授

基地としての役割も担っている。このような多国籍企業の現地工場は、中東欧諸国に豊富で、しかも教育程度は高いが西ヨーロッパよりもかなり低い水準の賃金で労働を雇用できるので、西ヨーロッパに立地する工場よりも競争上の優位性を獲得できるのである。そして、スペインやポルトガルの例から類推するに、このような優位性は当分の間続くことが期待されるのである。

さて、本書の構成であるが、全体は4部からなっており、第1部では文化的・歴史的・政治的背景を述べたのち、ポーランド王国時代の経済、三分割時代の経済、独立直後の経済、大恐慌下の経済、社会主義政権下の経済から体制転換までのポーランド経済について、時には他の中欧諸国やスペイン等との比較分析等も加味しながら詳述している。第2部では、せっかくズウォティという国民通貨を持ちながら、なぜ外国通貨である米ドルを国民が選好し、事実上の「二重通貨制」になってしまったのかについて考察を巡らす。そして、巨額の対外債務の削減・繰り延べに加え、ズウォティの交換性回復のための外国からの通貨協力を得ながらいかにしてこのような状況から抜け出したのかについても詳しく分析している。第3部では、ポーランド経済の体制転換について、旧ソ連・東欧諸国の財政改革の進展、民営化の進展、市場経済化率の推移、所得分配の変化等、といった体制転換の推移とも比較しながら、ポーランドのそれを財政問題の側面からの検討も加味しつつ詳しく分析している。第4部では、NATO、EU、OECD、CEFTA、といった欧州を中心とした政治経済システムの中でのポーランドの位置付け、EUでの通貨統合、政策金利の動向、中欧三国の投資環境と税制、EUの共通農業政策、NATO加盟に伴う財政負担、原発等のエネルギー供給問題と環境保全問題、といったポーランドをめぐる国際情勢について詳細に検討している。

著者の力点が、ポーランド経済におかれていることは本書の題名から明白であるが、中でも財政問題およびマクロ経済分析に焦点が当てられている。それにもかかわらず、最初に述べたように著者の該博な知識が至る所ににじみ出ている、研究者にとっては百科辞書的な便利さを具えているうえに研究入門者にとっての手引書ともなっている。巻末の参考文献および歴史年表の作成は大変手間暇のかかるものであるが、読者にとっては大変便利なものである。

ただし、褒めてばかりでは評者の役割としては不十分である。ないものねだりとはなるが、中東欧諸国において少なくとも過去においては深刻であった環境問題がその後どのような推移をたどっているのかについて5～6ページ程度は割いてほしかった。また、もう少し時間をかけて文章表現にさらなる推敲が加えてあればもっと読み易くなっていたのではないか。著者の今後のご活躍に期待したい。